## コーヒーブレイク

# 定年後二十年、歴史研究家と言われるようになった歩み

市丸 昭太郎 Ichimaru Shotaro



#### 1. 歴史研究のはじまり

私は、入社して10年間大阪工場に勤務しましたが、後半の五年間は趣味として詩吟を練習しました。

伊万里工場に赴任して来た時、大阪からの詩吟仲間もいたため、会社で詩吟クラブを立ち上げ、県の連盟にも加入し、地域の愛好家などと活動を始めました。しかし、未曾有の大造船不況に見舞われ、残念ながら約10年間で解散となりました。

詩吟は漢詩を吟ずることですが、漢詩の意味を理解する 必要があります。李白や杜甫の漢詩は、唐時代の背景を知 らなければなりませんので、歴史小説は暇をみて読んでい ました。この頃から歴史が好きになっていったようです。



写真1 大阪時代の詩吟クラブメンバーとともに



写真2 武雄寒梅マラソン出場

さて、私は伊万里に赴任してからランニングも行っていました。会社の陸上部に入り、東西松浦駅伝大会などに当社の名前で出場していました。

46歳の時、武雄寒梅マラソンに出場して2位か3位かに入賞し、賞状を受け取ることになりました。表彰者は、当時の武雄市教育長の吉野先生でした。小学校6年生の時の担任の先生です。吉野先生は私の名前を読み上げると、顔を数秒見つめられた後、ニッコリされて賞状を渡されました。30数年間お会いしたことがありませんでしたが、私の顔を覚えて頂いていたことに大変感動しました。

その後、定年で実家の武雄市橘町に帰った時、吉野先生

は橘町歴史研究会の会長をされており、歴史講座を公民館で開催されていました。私は賞状を貰ったあの時の 先生のお顔が忘れられず、講座に参加させて頂きました。

そこで橘町郷土史にも興味を持ち、特に橘氏一族の活躍についての勉強を始めていきました。

### 2. 郷土史家との運命的な出会い

定年で実家に戻った年、両親が相次いで亡くなり、翌年から四国の遍路旅を2回しました。2回目の旅の途中、早々に到着した土佐清水市の民宿「久百々」で新聞を読んでいたところ、玄関先で、女将さんと遍路さんと思われる客の押し問答が聞こえてきました。聞いていると、女将さんは「客室が満杯なのでお断りします」と言い、客は「何とか宿泊させてほしい」と言っています。この宿から先は山の中に入り、22キロほど宿はありません。引き返すにしても前の宿までも遠いという状況でした。予約せずに来た客も



写真3 土佐清水市民宿久百々にて

客、断る女将さんも女将さんだと思いながら、私は女将さんに相部屋を申し出ると、「市丸さんが良ければお願いします」となり、同宿 することになりました。

この遍路さんは福岡市の吉武さんと言う方で、私が相部屋を申し出たことに感激され、また郷土史の勉強を していることを知り、どうしても義理の兄で福岡県の郷土史家である吉永正春先生を紹介したいと言われまし た。歴史の勉強を始めたばかりの私は何かに引っ張られるような感じがして、後日吉永先生宅を訪問しました。

吉永正春先生に出会ったことで、このような中世の歴史家に成りたいと思うようになっていきました。以後 3年間交際を続けましたが、交通事故で亡くなられました。

吉野先生と郷土史を勉強し始めて約2年経った頃、 先生の家で波佐見町の歴史研究家橋口さんを紹介され ました。

橋口さんは、肥前中世史研究会の事務局をされていて、私に肥前中世史研究会に入会するように勧められました。

肥前中世史研究会は、西肥前の中世史を研究する会で、佐賀県側からは武雄・鹿島・嬉野、長崎県側からは 佐世保・川棚・波佐見・東彼杵・大村等の各市町の第一 人者ばかりの集まりです。歴史の勉強もまだ出来てない私がそのような専門家の研究会への参加は無理とお 断りしたら、実は橘氏のことを知る人がおらず吉野先



写真4 肥前中世史研究会の皆さん

生は高齢で無理のようなので是非私をと請われてしまいました。橘氏のことは大体解っていると自惚れていたのでしょうか。「参加させて下さい」と了承しました。吉野先生は「市丸おまえ行くか」と驚かれました。

この橋口さんとの出会いが、中世の歴史を研究する大きな飛躍の切っ掛けになったと思われます。

参加した肥前中世史研究会は、会員は13名で、皆さん75歳~83歳までの高齢の方ばかりでした。私はパソコンが出来ることから、早速会計と事務担当を任されました。また、書記も頼まれました。当初は話の内容が良く理解出来ず、恥ずかしい不十分な内容の議事録を皆さんに配ることになりましたが、全員が怒ることなく、蔑むことなく、温かい言葉でリードしてくださいました。皆さんに教えられ、専門書を図書館で読んで勉強を重ねて、徐々に良い議事録になっていったと思っています。

半年ほど経ったころ、波佐見町出身の歴史学者黒板伸夫先生と奥様の永井路子先生を講演会に呼ぶこととなり、事務担当の私から電話をすることになりました。永井路子先生は直木賞も受賞された日本の女流歴史小説家の第一人者です。電話する時には緊張し声が震えましたが、永井先生に「もう少しゆっくり落ち着いてお話しましょう」と優しく言って頂き、感激しました。

講演会前日は、私の車で武雄から大村まで行き、大村で歓迎会を行いました。当日は、大村から講演会場の波 佐見までお送りし、その間にお二人とお話が出来たことで、改めて歴史の奥の深さを知り、歴史研究を私の生涯 のテーマにしようと決めました。



写真 5 西肥前中世史年表

それから1年程経った頃、研究会で「この肥前中世史研究会の目的は 理解出来るのですが、討議だけで終わるのですか」と質問をしました。

皆キョトンとした顔をされていましたが、会長が「何か案があるのか」と言われましたので、討議したことを地域の愛好家に広く知ってもらうために『西肥前中世史年表』を作成したら良いのではないかと提案しました。

皆大賛成となり、早速私がパソコンで作成に入りました。約10年で 完了出来、長崎・佐賀県内の図書館に寄贈することになりました。出来 上がった頃は私も75歳となっていましたが、研究会の先生達は相次 いで亡くなられてしまいました。

#### 3. 歴史書『龍造寺氏と鍋嶋直茂』の出版

さて、話は10年前に戻りますが、私は64歳の時、県高齢者大学(現:ゆめさが大学) 鹿島校に入学しました。男女半々で女性達が活発に活動されており、2年間の勉学の後、卒業間際に佐賀校・唐津校・鹿島校の三校 交流会が行われました。

私は鹿島校の代表として出場し、これまでの郷土史研究の経験から「生涯教育としての意識改革」について次のような話をしました。

「家の中にいては、出会いは在りません。また感動を得られません。皆さん家から一歩出ましょう。何かに向かって一生懸命であれば、類は類を呼ぶと言います。必ず仲間が出来ます。意識を変えることは幾らでもあります、ようは『やる気』です。元プロ野球松井秀喜選手の母校星稜高校のグラウンドには、次の言葉が掲げてあるそうです。『意識を変えれば行動が変わる 行動が変われば習慣が変わる 習慣が変われば人格が変わる 人格が変われば運命が変わる』」

参加された皆さんから大喝采を受けました。



駅舎も吉野ヶ里のおかげでしよう 小学校の時、 吉野ヶ里の あまりに違い。 四日目 イカラな んぼの中に建っているモダンな神埼駅無事 な駅舎にビックリ も終りました。 駅舎の後 せいなの 汽車を見に遠足で行った駅舎とは みはらしも良くビッ 後の到着駅神崎 六十の歳月の変化は凄い 勿体無い程立派でした。 立派なものでした。 向井 草市 Щ

写真6 街道歩き会十四日目

卒業する時、女性から街道歩きをして歴史を教えて下さいと言われ、街道歩きの会を作ることになり、結局男性3名女性5名計8名で街道歩きを始めました。

街道歩きの会では歩く1週間前に集まり、何処を歩くのか、どのような見物箇所があるのかを確認し、歩き終えて1週間後に写真をみて感想文を書くようにしました。まずは長崎街道を長崎から小倉まで歩き、以降唐津街道・平戸街道と8年間歩きました。

この会では私1人で写真編集等を行っていたので、分担しようと提案しましたが、パソコンを持たない人ばかりでしたので、「パソコンを勉強したい、購入するので教えて下さい」と言われた女性2人に特別に勉強会を開いて教えることにしました。すると2年程経ったころパソコンの勉強会を歴史の勉強会にしようと提案がありました。

私より年上の女性達で、本当に歴史の勉強をするのだろうかと疑問を持ちながら、3人で歴史の勉強会に入りました。1人が龍造寺氏を、1人が鍋島直茂を勉強し、私が指導することにしました。

更に2年経った頃、牛津で偶然にも龍造寺家の家紋「十六日足(ひあし)紋」を見付けました。佐賀県内では全て「十二日足紋」であり、又、日本家紋集を見ても龍造寺家は「十二日足」です。不思議に思い色々調べていましたら、『葉隠聞書』の中に、龍造寺本家の家紋は「十六日足」で、庶家は「十二日足」・「八日足」とありました。

一方、私は多久の古文書学校に12年程通い、県立図書館から『近世史料集』作成の編集員に任命されていました。多久市歴史民俗資料館で古文書の勉強中、昼休みに鎧(よろい)兜(かぶと)が展示してあったのを見て、肩に「十六日足紋」を見つけました。先生達に訪ねると、瀬田家の家紋だと言われました。家を教えていただいたら、なんと名村造船所鉄構事業部に在職中に発注した水門工事の検査に来たことがある瀬田鉄工所でした。早速瀬田家へ電話を入れると、瀬田君はビックリして喜び、私を家に招いてくれました。



写真7 書籍『龍造寺氏と鍋嶋直茂』

その後調査を続けたところ、系図から瀬田家が龍造寺本家筋であることが判明し、改めて龍造寺氏を本格的に研究しました。

3人での龍造寺氏と鍋島直茂の勉強では、私が難しい専門書を 読み、女性2名がまとめた文章をさらに私が修正し纏めていきま した。そして、この本格的な歴史書は県内にも出版されていない ことに気が付き、我々で出版を決めました。すると、彼女達は「こ れは市丸さんが書いた書ですから、市丸さんの出版として下さい」 と言って頑として聞かなかったので、私一人の出版としました。

3年前の平成29年1月に『龍造寺氏と鍋嶋直茂』が書店に並んだ時は、何か歴史研究者の一員になったような気になり感動しました。

これで自信がつき、研究を続け、令和2年6月に第2冊目として『少弐氏の興亡とその一族』の発刊を佐賀新聞社に依頼しました。出版は令和2年10月中頃の予定です。

### 4. 定年後、二十年の気づき

現在、私の活動は、12年前から我が橘町歴史研究会の会長をしています。今までに会員皆で、『橘町の歴史』・『橘町内の石造物と地名』・『橘町近代・現代史』を発刊しています。大村中世史研究会では7年前頃から講師として呼ばれ、月2回行っています。本を出版している勉強会は「歴笑会」と名付け、毎月2回会合を行っています。

時々講演依頼等も有ります。

2年前、武雄の老人会施設(日輪荘)で詩吟の練習をされているのを知り、また大声を出すことは認知症予防に良いと聞き参加しています。皆さんからお上手と持ち上げられ、月に5回練習に行くことになりました。

さらに、地域の老人クラブの会長を令和2年4月から引き受けざるを得なくなり、毎日忙しい日々を送っています。

歴史研究会の先生と良く言われますが、何故このようになったのか振り返ってみて気付いたことは、人との 出会いを大事にしたことと、投げ出さずに一生懸命に取り組んだ結果であったと思われます。

歴史は好きだったのでしょう。数々の運命的な出会いから、世界が広がり、奥深さに強い感銘を受け、たくさんの人に歴史の魅力を伝えたいと思いました。

定年から20年、夢のように通り過ぎたように思われます。ランニングをしていたためか、健康体で薬は何も 服用しておりません。

これから先の20年、何をするか。百歳までの工程表を書くことと、若い人を育てる使命を感じています。

執筆して頂きました市丸氏の株式会社名村造船所における概略の経歴についてご紹介します。

- 1962年 4月 株式会社名村造船所入社
- 1962年 9月 造船部工務課勤務
- 1965年 9月 造船部船設課勤務
- 1972年10月 伊万里工場準備室勤務
- 1973年10月 伊万里工場工作部外業1課搭載係長
- 1982年10月 生産管理部検査2グループリーダー
- 1994年 7月 生産統括本部品質管理部
- 1994年11月 生産統括本部品質管理部鉄構検査グループリーダー
- 1997年 7月 鉄構事業部工事部工事1課
- 2001年 3月 定年退職